



浅見 京花 (あさみ きょうか) 松枝小 3年生

作品名: 命の大切さ

図 書: ひまわりのおか

わたしは、「ひまわりのおか」という本を読みました。この本を選んだのは、この本が東日本大しんさいの事について書かれていたからです。この地しんがおきた時わたしは年長でようち園のバスに乗っていました。バスはてい車し、みんなケガもなく大じょうぶでした。家ぞくも全員ぶ事でした。帰たく後、東北地方で大へんなひがいやぎせい者が出た事をテレビで見たのをおぼえていたので、この物語を読みたいと思いました。

この本は地しんのひがいにあつたみやぎ県石まき市立大川小学校七四人の子どもたちとそのお母さんたちが主人公の物語です。大川小学校は、みんなで一〇八人の小さな小学校です。みんななかよしで大きな家ぞくのような学校です。二〇一一年、三月一日午後二時四六分、とても大きな地しんがありました。子どもたちは、いそいで雪のふる校庭に集まりました。お休みしていた子、すぐにお家の人むかえに来てくれた子もいました。のこつた七八人の子どもたちが、こわさと寒さにふるえていました。「つなみがくる！」子どもたちがおかの花だんにむかつて歩き出した時、大きな大きなつなみがみんなをのみこみました。七四人の子どもたちと一〇人の先生の命をうばいました。「早くお家につれて帰つてあげたい」「もう一度だけだきしめたい」お母さんたちは、くる日もくる日も子どもたちをさがしました。がれきを運び、土をほり、海のそこをのぞきました。六月のはじめ、一人のお母さんが「おかの上の花だんに、ひまわりをうえようよ」と言いました。「ひわまりがさいたら、きつとよろこぶよ」「みんなここに来たかつたんだもんね」とほかのお母さんたちもさん同して、ひまわりのたねをうえました。やがて小石だらけの土から小さなめが顔を出しました。お母さんたちは、ひまわりのせ話をしながら、子どもたちの事を話します。あの日からちようど四九日目にみつかつたあいちゃん。スポーツが大すきで、お家のみんなが大すきで名前のとおり、みんなにあいされる子でした。写真は全部、ひまわりみたいに、にこにこえ顔でした。あいちゃんは六年生でした。三人姉妹のお姉ちゃんのりんねちゃん。よく妹のおせ話をしてくれました。本と歌が大すきでダンスも上手でした。小さいのに、妹がいじめられたりすると、「りんねの妹いじめんじゃないよ！」って大きな子にもたちむかう子でした。りんねちゃんは二年生でした。たく海くんは、こん虫が大すき。アリのすやアリジゴクを見つくとずっと見ていました。トンボやバッタもつかまえて「ね、かわいいでしょ」っ

てお姉ちゃんに見せて、お姉ちゃんの未空ちゃんはこまった顔をしていました。未空ちゃんは「たいへん今までお世話になりました」ってお手紙をお母さんにあげていました。そのさい後には「そだててくれてありがとう」って。まるで何もかもわかっていたようでお母さんは、なみだが止まりません。たく海くんは三年生、未空ちゃんは六年生でした。

ひまわりは、お母さんのせたけをこえました。大きくあつくなつた葉っぱ、ちくちくの太いくき。台風の風にもまける事なくおかの上のひまわりたちは、たくましくそだっていきました。真っ青な真夏の空にたくさんのえ顔がさきました。大川小学校の方をむいて、ぴかぴかの花がさきました。ひとつぶの小さなたねが、千つぶものたねになりました。そのひとつぶひとつぶが、一人一人の子どもたちの、思い出のように思えました。

わたしが、この本を読んで、一番心にのこったところは、わたしたちと同じように生活していた小学生たちが、いっしょんにして、つなみにのまれてしまったところです。わたしはこの部分を読んで、地しんは本当に、こわいなと思いました。子どもたちがかわいそうだなと思いました。もしわたしがつなみにのまれてしまったら、くらくていきもできない広い海の中でお母さんや家ぞくに会いたいと強く思うだろうと思うと、なみだが止まらなくなりました。また、子どもをなくしたお母さんたちも、かなしいだろうなと思いました。今、自分が生きている事に感しゃし、お母さんたちがうえたひまわりのように、太陽にむかって強く、たくましく生きていきたいと思いました。

わたしは、この本から命の大切さ、家ぞくの大切さ、人へのありがとうの気持ちをわすれずに、これからもがんばっていきたいと思いました。